

4. ブドウ園における復旧の進め方

1) 被害状況

棚が雪に埋もれてしまったため、雪の重みや沈降により棚が下方に引っ張られ（図42）、それに伴い、樹体も同様に引っ張られたため、枝が折れたり裂ける等の被害が多発しました（図43）。



図42 棚面の沈降



図43 主枝の折損

2) 復旧方法

樹体の修復に先立って、棚の補修を行います。まず、枝の結束を全て外します。次に、太い主枝などは下から支柱で支え、棚面から浮かせて、棚に力がかからないようにします。このような状態にしてから、隅柱や周囲柱の立て直し、ワイヤーや番線の引き直しを行います。

棚の補修が終わったら、樹体の修復に取りかかります。最初に、成木の場合ですが、図42の成木は右側の主枝は完全に折れてしまっており、左側の主枝は半分程折れている状態です。左側の主枝は通導組織（養水分の通り道）を横切るように折れています。この場合、養水分の供給量は半分程度に減ってしまい、正常な成長は難しいと考えられますので、伐採の対象とします。片方の主枝だけの損傷であれば、損傷箇所をきれいに切り取り、傷口に塗布剤を塗って保護します。その後は、正常な主枝から枝を持ってきて、欠損によって生じた棚面の空間を埋めるようにします。

次に、若木の場合ですが、図44のように、主枝分岐部の裂開も多く見られます。この図では、主幹の割れている部分が右側の主枝方向に偏っていますので、右側の主枝への養水分の供給量が減ってしまい、成長が劣ることが予想されます。このような場合は、右側の主枝をきれいに切り落とし、傷口に保護剤を塗布します。そして、反対側の主枝から枝を持ってきて、再度、主枝を構成し直したほうが良いと考えられます。

図45は同じ主枝分岐部の裂開ですが、主幹の真ん中できれいに左右均等に縦に割れている場合は、養水分の供給が大きく遮断されることはないので、樹体を維持できる可能性が高いと考えられます。若木では修復できる可能性が高いので、図46～48にその手順を示します。



図44 主枝分岐部の裂開
(裂開部の偏りあり)



図45 主枝分岐部の裂開
(裂開部の偏りなし)



図46 被害を確認したら、傷口が乾く前になるべく早く処置すると、回復する率が高くなります。

まず、主枝を両側から引き寄せ（主枝が大きく人力で無理な場合は張線器を使う）、被害部位をなるべく密着させます。

次に、被害部位が離れないよう、カスガイやボルトで固定します。固定後は被害部位に塗布剤を塗り、傷口が乾燥しないように保護します。



図47 さらに、被害部位をロープやわら紐等で締め付けます。



図48 最後に、被害部位に水が侵入しないよう、表面を肥料袋等で覆い保護します。

傷口を覆っているビニールは、傷口のカルス形成が確認されたら外します。また、裂開部を修復した樹は、一見、傷口が塞がったように見えても、無理な力がかかれば容易に再び裂開してしまうので、継続して注意深く管理する必要があります。

図49は2年生樹の被害です。雪の沈降に伴い、主枝が下に引っ張られ、S字状に折れてしまいました。この場合は、折れた部位の下方にある芽の直上で切り戻して、主枝を出し直します。ただし、接ぎ木部位より上の位置でなくてはなりません。また、明確な芽が見当たらなくても、陰芽からの発芽が期待できますので、同様に処置します。



図49 2年生樹の被害